



2支群3号横穴の線刻画	2支群12号横穴の線刻画
2支群5号横穴の線刻画	2支群3号横穴の線刻画

高井田横穴群の線刻画

古墳時代には土や石をもりあげて墳丘を造営し、墳丘のなかには割石や巨石で架構した墓室 竪穴式や横穴式をもうけることが普通であった。これにたいして、崖に墓室を掘削し、墳丘のない墓もほぼ同時につくられた。これが横穴で、九州から東北まで日本列島各地にある。

生駒山地西斜面の南部には、主として横穴式石室をもつ円墳が大小の群をなし、八尾市の高安千塚までを含めると優に千基をこす後期古墳が集中している。高井田横穴群は、生駒山地の最南端の、海拔30mから60mにいたる崖面にある(27p図5参照)。南北約200mにおよび、範囲内の尾根には円墳も築かれ、犬の埴輪が出土している。この範囲内には、数回にわたる分布調査で、総数120基の横穴の存在が知られるようになり、埋没分やすでに消滅したものを加えると200基ほどはであると推定される。

高井田横穴群は、大正6年に藤田家の墓地の造成工事中その一部に遭遇し、その1基(3支群6号)に描かれた船と戦士の線刻画は、高橋健自氏によって《人物の窟》と命名され、原始絵画の粹として学界に紹介され、多くの美術史や考古学関係の書物で紹介された(左下図)。人物の窟を含む10数基の横穴は、大正11年には史跡指定を受け今日にいたったが、それは高井田横穴群のごく一部にしかすぎず、今日では四つの支群によって構成され、史跡指定はそのうちの3支群の一部であるという危惧すべき事実がわかってきた。生駒山地を北から南へと眺めても、なお緑の森林ののこるのは平尾山千塚から高井田横穴群にいたる部分で、宅地開発などが簡単にはおこなえないほど遺跡が多い。だが逆にいうと、史跡指定地のごく狭いからたいへん危険なのである。昭和45年ごろから小規模な開発があつたとたず、また大開発の計画のあることも噂されるようになった。

先に述べた徹底的な分布調査は、このような事態に対しての民間団体や公的機関のおこなったものであったが、このころから従来知られている以外にも線刻壁画の存在が注意されてきた。これらの成果をもとりに、和光大学壁画研究会が3年間の研究をまとめ『高井田横穴群線刻画』として出版したのは昭和53年春である。そこには、すでに学界に知られているものをも含めて合計26基の横穴に線刻画の存在が指摘され、世間を驚嘆させた。しかし古くからの史跡指定の横穴には保護施設はあるが、他の多くの線刻横穴は荒れるにまかせられていて、大開発の噂とともに、日本列島中央部最大の古墳壁画の宝庫の将来が案じられている。

高井田横穴群は、玉手山横穴群とほぼ同時に掘削がはじまったが、大勢としては高井田の方が早く横穴づくりが衰えている。だが数の点では、6世紀後半には玉手山をしのぐほど横穴づくりが盛んであった。和光大学で西洋美術史を担当している北原一也氏は、大正時代から名高い人物の窟の壁画は、最近検出された高井田の2支群の横穴の壁画にくらべて「退化した弱々しさ」が感じられるとらされたが、確かに初期の横穴には、稚拙ながらも生命力のあふれている線刻画が多く、《人物の窟》は後期末に近づいている。

人物の窟の主要な絵画は、玄室前道の相対した両壁に集まっていた、いずれも一艘の舟と人物群とで構成されている。右壁(内から見て)には、右上にゴンドラ風の舟があり、その中央に槍のようなものを持った戦士が立ち、艦と舳先にはそれぞれ一人の漕手が小さく表現されている。左側の人は櫂をこぎ、右側の人は石を網でつるした錨か、あるいは舵をもっている。この船は横道の方に向いているようで、舟の左、つまり全構図のほぼ中央には両手で槍のようなものを

を差しあげている戦士があり、この人物だけ靴の表現がはっきりして、いかにも地上に立っていることを強調しているようである。左下には、大きな描きかけの人物があるけれども、一見未完成のような描法が何かの状態の表現かもしれない。このほか3人の人物がいる。中央下の人物は、他の人物が乗馬ズボンのように上のふくらんだズボンを着けているのに、裏のようなものをつけていて、高松塚壁画の女性の衣裳に通じるようにも見えるが、あるいはふくらみのないズボンをつけた男性かもわからない。

左側の玄室前道にも、右壁に類似した絵画がある。左上の舟は、よくそろうた二挺の櫂で漕がれていて、漕手は右壁よりもずっと大きく描かれ舟の中央には人物があらず、U字形を逆にしたようなものがある。この中央のものが、棺をのせているのであれば、葬送の場面になる。舟の下と右側に3人の人物が描かれているが、剥落部分があるので、本来の人数ではない。これらの人物の頭は、右壁の人物の表現とかなり相違し、とくに舟のすぐ右に立つ人は、まるでスキー帽のような深い帽をかぶり、目と鼻を大きくして、老人のようである。

3支群には、この6号のほか11号、14号、16号、18号などに、ほとんど各壁面一杯に線刻画がある。それらは複雑をきわめるが、何の図柄がよみとれないものが錯綜している全体のなかに、歴史的な意味、いいかえれば古代人の精神がある。考古学の方法としては、これらの壁画が一度に描かれたか、どこを、どの順序で追加しているかなどを明らかにする研究がまず必要であって、各横穴壁画の意味の解釈は今後にゆだねられる。

史跡指定外では、1支群5号、2支群3号・5号・12号・27号、4支群8号などの横穴の壁画が重要であり、とくに2支群の3号と12号は、日本の線刻壁画のなかでも双壁であろう。3号横穴は、鳥の窟といってよいほどに鳥を描き、玄室の天井には大小の鳥20羽ほどが壁面をうめついている(表紙カラー)。鳥のあいだに網や網状の絵があつて、鳥を網でとったり、網にいれてある図柄ともとれる。鳥の図柄は、さらに玄室の左右、前面(玄門部分)などの壁にも描かれている。左壁と前面の壁には鳥のほかにも人物もあるが、全身図ではなく、顔や上半身をあらわしている。

この横穴では、玄室前道の左右の壁にすばらしい騎馬像がある(表紙カラー及び扉写真)。右壁と左壁とは表現がまるで違っていて、同人画工の手では不可能とおもうが、さらに右壁には上半分剥落した馬の図があり、この細部が玉手山北群10号横穴の馬と似ており、少なくとも3人の画工が関与している。

12号横穴には、天井に2mをこす大きな鳥があり、奥壁には舟、奥壁と玄室右壁には竊屋をあらわすと推定される忌垣がつづく。玄室前道右壁にも舟があり、そのほか人物の上半身や円文などで、ほとんど全面が満たされている。剥落が進んでいて、保存が憂慮される(表紙カラー)。

高井田横穴の壁画の価値は、和光大学古墳壁画研究グループの努力で明らかになったとはいえ、土砂に埋まっている横穴や崩壊して入れない横穴なども多く、全貌の把握は急務を要する。開発に対して、まず史跡指定を全域に拡大して、とにかく保存を実現しなければならぬ。これらの壁画の大半は6世紀後半のもので、玉手山や香川県宮ヶ丘古墳の壁画と描法や図柄で共通する点が多い。また日本の古墳壁画にとらわれずに、北欧、アルタイ、シベリア、朝鮮半島での岩壁画との流れのなかで位置づけることの必要性を北原氏たちは指摘している。短い時間の制約をこえた伝統を、この地で爆発的に開花させたのに百済系の渡来集団が関係していたのであろうか。(森 浩一)



従来から知られていた <人物の窟> 2支群6号横穴の線刻画。(内からみて右壁に描かれた画の主要部)

Kubota
美しい日本をつくろう。